

# 日本近代建築の「父」

回顧展が開かれているのは、神奈川県鎌倉市の県立近代美術館鎌倉。会場には建築の専門家や学生をはじめ外国人や親子連れの姿もあり、代表作「群馬音楽の家」一階馬音楽センターなどの写真や模型に見入っていた。二百点余りの展示作品には、レーモンドに師事した建築家吉村順三（一九〇八―一九七七年）が設計した愛知県立芸術大（愛知県長久手町）の模型なども含まれ、日本近代建築の「父」としての存在が強調されている。

とはいえ、日本での本格的



## レーモンド再評価の波

（関口威人）

戦前から日本に住み、南山大（名古屋市昭和区）など多くの名建築を残したチエコ生まれの米国人建築家、アントニン・レーモンド（一八八八―一九七六年。写真は六五年ころ）を再評価する動きが高まっている。この秋には初の本格的な回顧展が始まり、日本建築史に与えた影響の大きさやモダニズムと伝統、自然との調和を図った先駆性が浮き彫りに、一方で老朽化した作品の保存問題が各地で顕在化している。日本を「よまなく愛しながら、外国人ゆえにたどった数奇な運命が今も尾を引いているようだ。

# 戦局、国籍にほんろう

な回顧展はこれが初めて。しかも今回は日米欧の研究者が共同企画し、米ペンシルベニア大とカリフォルニア大サンタバーバラ校で先行開催した巡回展だ。講義生活の長さや活動の深さに比し、「知られざる人」の印象はなお強い。レーモンドが妻でデザイナーだったノエミとともに初来日したのは一九一九年。「帝國ホテル」建設のため、巨匠フランク・ロイド・ライトの助手として米国から渡航した。二年後にはライトから独立し、そのまま日本で設計事務所を開設。外国人の邸宅や大使館などを、当時最先端のコンクリート造りと近代建築様式で表現させた。

「つうした力量は海外の建築界からは評価されていたが、逆に日本では外国人として異端視。戦中は日米の戦局悪化で二時離日を余儀なくされたばかりか、日本の都市構造を知らず米国人として米軍の対日軍事作戦にも引き込まれた。それでも戦争が終わると再び日本に戻り、戦後初めて手掛けた「リーガーズ・スタジオ」エント東京支社」が五二年に日本建築学会賞を受賞。ようやく日本の建築界で脚光を浴



レーモンドの国内初の本格的な回顧展会場。手前は「群馬音楽センター」の模型＝神奈川県鎌倉市の県立近代美術館鎌倉で

# 初の回顧展 現代的設計に注目

びた。しかし、当時としては余りにも斬新なガラス張りの近代建築が耐震性についての大論争を巻き起こした末、十三年後にはレーモンドの了解のないまま建て替えられた。その後、七三年に日本を離れるまでの四十四年間、国内に四百余りの作品を残したが、その生涯は苦難と叛乱に満ちていたと言える。

再評価の波は何度か訪れ、次第に高まってきた。特に注目されるのは、機能的な近代建築の理念を日本の気候風土に合わせて木造で表現した「立近代美術館鎌倉」0467建築を環境と調和させたりし

た極めて、現代的な設計思想だ。回顧展に合わせて開かれたシンポジウムで、ペンシルベニア大付属建築博物館のウィリアム・ウイテカー主任学芸員は「グローバルな建築家像を考えるうえで、レーモンドの再評価は欠かせない」と述べ、国境を越えた共同研究を呼び掛けた。

◇ 「アントニン&ノエミ・レーモンド展」は二十一日まで（九日、十五日は休館）。有料。問い合わせは、神奈川県立近代美術館鎌倉（0467-55000）へ。

# 老朽化で保存問題も

再評価が進む中で、大正から昭和にかけて造られたレーモンド建築は老朽化が進み、保存問題も焦点となっている。

レーモンドがキャンパス全体を手掛けた東京女子大では昨年、新たなキャンパス整備計画に伴い、一九二四年建設の寮と体育館の解体が決定。これに対し、卒業生らを中心に反対運動が巻き起こったが大学側は譲らず、寮は今年九月までに姿を消し、体育館も来年に取り壊される予定。

中部地方には南山大をはじめ名



古屋国際学院（名古屋市守山区）、三重大レーモンドホール（津市）などの作品が残る。

中でも六四年完成の南山大「写真」は、レーモンドにとって二度目の学会賞受賞作となった名建築。起伏のある地形や木々が生かされ、環境計画の手法となっている。しかし、校舎群は現行基準では耐震性が著しく低く、二〇〇三年度に大規模な補強工事を実施。丸山雅夫副学長は「当面の対応は済んだものの、いずれ同じ問題が浮上ってくる。歴史と落ち着きのある素晴らしいキャンパスだが、大学としてはあくまで安全第一を考えた」としている。